２０２４年　３月　２９日

巻名	頁	該当箇所	補足
通史編６ 近現代２	９９	**甲府連隊**　国際輿論の反対を押しきって満州国を建国した後も、軍部は野心を膨らませて、満州から中国華北への**満州移駐**　浸透を画策した。一方、建国した満州国内では、入植した日本農民に耕地を奪われた中国農民がゲリラ化して、この制圧のためにも兵力増強が必要となった。 かくして昭和十一年はじめ、甲府歩兵第四十九連隊を含む第一師団の満州移駐が決まった。その直後に、同師団第一・第三連隊などの青年将校たちが、部下を率いて閣僚・重臣らを殺害する二・二六事件を起こした。反乱鎮圧を命じる天皇の強い意志で、動揺した陸軍首脳も近県の連隊を動員し、反乱軍鎮圧の構えをとった。甲府連隊も緊急出動命令を受け、完全武装で上京した。兵火を交えることなく青年将校らが屈服した後、一か月間帝都警備に当たった連隊は、甲府に戻ってまもなくの五月八日、軍旗を先頭に県民の盛大な見送りを受けて特別軍用列車で甲府を出発し、六月十七日北満北安に着き、一部はさらにソ連軍と対峙する北の最前線黒河に配備された（樋貝義治『戦記甲府連隊』満州編）。	「六月十七日北満北安に着き」という記述について、日本大学助教笠原孝太様より、五月十七日の誤りではないかとご指摘をいただきました。 本県史では、出典元「戦記甲府連隊」の記載内容を原文のまま記載していますが、ご指摘の通り出典元には、「五月十四日大連に上陸」、「三日間満州の大地をひた走って」、「甲府の兵営を出発してからすでに十日」との記述があり、前後関係から北安到着は五月十七日とも読みとれます。 当該箇所を引用する際には、右記内容にご留意いただけますようお願いします。